

# 「慶長小袖」に関する一考察

—江戸時代の呼称といわれる「地無」と「繡箔」という言葉について—

The Meaning of *Jinashi* and *Nuihaku*,:  
Words Historically Regarded as Edo Era Names for the *Keicho Kosode*'

莊 加 直 子\*  
Naoko SHOKA

# 「慶長小袖」に関する一考察

## —江戸時代の呼称といわれる「地無」と「繡箔」という言葉について—

The Meaning of *Jinashi* and *Nuihaku*,:  
Words Historically Regarded as Edo Era Names for the *Keicho Kosode*\*

莊 加 直 子\*  
Naoko SHOKA

**Abstract** Previous discussions of the *keicho kosode*-style *kosode* were based on the commonly accepted theory that this garment was called a *jinashi* (*kosode*) (“obscured-base-cloth *kosode*”) or *nuihaku* (*kosode*) (“*kosode* with embroidery and metallic foil”) in the Edo era. However, the true meanings of these words have not been examined. I clarified the meanings of *jinashi* and *nuihaku* in the Edo era by investigating *kimono* purchase orders made early on in this era, when the dyeing and weaving of artifacts called *keicho kosode* were constructed, along with essays written after the mid-Edo. Furthermore, I investigated the ongoing association of the words *jinashi* and *nuihaku* with the dyed and woven artifacts called *keicho kosode* and with the term *keicho kosode* after the Meiji era, when dyed and woven artifacts were becoming valuable as artworks. I concluded that *jinashi* and *nuihaku* are not the same as the dyed and woven artifacts contemporarily called *keicho kosode*.

**Key words:** *kosode* styles 小袖様式, *keicho kosode* 慶長小袖, *jinashi* 地無, *nuihaku* 繡箔, meaning of *kosode* 小袖の言葉

### 1. 研究の背景と目的

小袖様式の一つとされる「慶長小袖」という言葉は慶長期（1596-1615）に製作され流行ったものではない<sup>1)</sup>とされながらその解明はなされていない。「慶長小袖」という言葉と染織品について、筆者はここ数年間研究をし、大正年間に「慶長小袖」という言葉の始まりを見出している<sup>2)</sup>が、現状、「慶長小袖」の詳細についてはほとんど未解明である。さらに、先行研究において、「慶長小袖」は江戸時代には「地無」や「繡箔（あるいは縫箔）」<sup>3)</sup>と呼ばれていたとされるものの、それらの言葉について詳しく論じられた先行研究はない。そのため、「慶長

小袖」と呼ばれる染織品と「慶長小袖」という言葉と、それらの江戸時代の呼称とされる「地無」や「繡箔（縫箔）」という言葉がどのように結び付けられたのかについても明らかにされていない。そこで、本論文では、「地無」「繡箔」という個々の言葉について解明することにより「慶長小袖」という言葉と「慶長小袖」と呼ばれる染織品について解明したいと考える。それら2つの言葉と染織品の「慶長小袖」と言葉が近代染織史の中でどう取り扱われたのか。そして、江戸時代の文献の中でこれらの言葉がどのようにとらえられていたのかを考察する。そのうえで、「慶長小袖」という言葉と「慶長小袖」と呼ばれる染織品と江戸時代の呼称であるとされる「地無」と「繡箔」という言葉がどのように結び付けられたのかを考察し、近代染織史における「慶長小袖」という言葉の解明に近づけたいと考える。

\* 人間生活学研究科 生活環境学専攻  
Graduate School of Human Life Science, Division of  
Living Environment

Table 1 Summary of previous studies

研究者名	所 属 (論文発表時)	論文名称	出版物名称	慶長小袖について							別 名	
				生地	慶長小袖の 地色	地の染め分け 縫いについて	技法	鹿の子絞り	刺繍に ついて	箔について	着用について	別 名
今永清士	東京国立博物館	染分四季花鳥模様縫 箔小袖	MUSEUM 163		茶・黒紅・ 紅・白	記載あり	絞り・刺繍・ 箔箔	記載あり	記載あり	記載あり	製作・着用年代 桃山の終わり慶長の 末から江戸の初期	地無小袖 織箔小袖
山辺知行	東京国立博物館	小袖染織における地 と文様について	MUSEUM 188		黒・紅・茶	内2色くらい	絞り・刺繍・ 箔箔		記載あり	記載あり	桃山の終わりから江 戸初期	記載あり
北村哲郎	京都国立博物館	染織における江戸初 期 一慶長織箔考一	MUSEUM 271						記載あり	記載あり	寛永期頃	記載あり
徳蔵さみ	茨城大学	衣服の文様について (2) 一慶長小袖と 寛文文様を中心とし て	茨城大学紀 要 25				絞り・刺繍・ 箔箔		記載あり	記載あり	慶長年間	記載あり
切畑健	京都国立博物館	元和・寛永銘小袖裂 打敷(真珠庵蔵)に ついて 江戸時代 前期の染織資料一	MUSEUM 376	綿子						記載あり		
山内まみ ・ 片岸博子	奈良女子大学	慶長小袖に関する一 考察	日本服飾学 会誌 5		黒・紅・白		染分・刺繍・ 箔箔			記載あり	慶長期と寛永期を中 心に慶長末から承応 の2節論ずる	記載あり
河上繁樹	文化庁	慶長小袖の系譜 一その成立と展開一	MUSEUM 383	綿子	黒・紅・白		絞り・箔箔・ 刺繍		記載あり	記載あり	慶長期に制作され、 流行したものである という確証はない	記載あり
河上繁樹	文化庁	江戸時代前期の小袖 一慶長小袖から寛文 小袖へ一	月刊文化財 228	綿子	黒・紅・白 3色		金箔箔・刺繍・ 鹿の子絞り	記載あり	記載あり	記載あり	慶長から寛永頃	
丸山伸彦	国立歴史民俗 博物館	近世前期小袖意匠の 系譜 一寛文小袖に 至る二つの系統一	国立歴史民 俗博物館研 究報告 11		紅・白・黒 紅		刺繍・絞り・ 箔箔		記載あり	記載あり		
長崎巖	共立女子大学		きものと裂 の言葉案内				刺繍・箔箔		記載あり	記載あり	慶長の末年から元 和・寛永期	記載あり
丸山伸彦	武蔵大学	慶長・寛文・元禄へ と動く意匠	江戸モード の誕生	綿子・ 紗綾	紅・黒紅・ 白		染分・刺繍・ 鹿子絞・箔箔	記載あり	記載あり	記載あり	おそろく寛永頃	記載あり
澤田和人	国立歴史民俗 博物館	慶長小袖の時代性一 中国・韓国の染織品 と比較して	アジア遊学		黒・紅・白	単色もあり	絞り・刺繍・ 箔箔				慶長期半ば	
丸山伸彦	武蔵大学	慶長小袖から寛文小 袖へ 一17世紀の狩 服師史における劇的 な変化	日本美術全 集(12)狩 野派と遊楽 図		紅・白・黒 (黒紅)	3色	絞り・刺繍・ 箔箔		記載あり	記載あり	慶長年間(1596- 1615)の制作や着用 を裏付ける資料を 伴った遺品は、現在 のところ知られてい ない	記載あり

## 2. 先行研究の検討

現在、「慶長小袖」という言葉や「慶長小袖」と呼ばれる染織品について書かれた論考などはあるものの、それらについては解明されていない。小袖の歴史や着物について書かれた書籍などで「慶長小袖」というトピックスなどで紹介され、その中で「地無」と「繡箔」が江戸時代の「慶長小袖」として紹介されることが多い。先行研究（Table 1）の中で「慶長小袖」の江戸時代の呼称が「地無」と「繡箔」であるとされた論考は10論考ある。そこで、まず、「慶長小袖」について書かれた論考を順に考察し、「地無」と「繡箔」という言葉と結びつけられていく過程を見出す。戦後の染織研究史において「慶長小袖」について初めて書かれた論文はおそらく今永清士氏による「染分四季花鳥模様縫箔小袖」<sup>4)</sup>であろう。この論文においてすでに「地無」という言葉と結びつけられている。また、続く山辺知行氏も「紋りと繡と箔で裂地の全面が埋められて地が見えぬくらい詰っている意味であろうか」<sup>5)</sup>と述べている。同じ頃、北村哲郎氏は「繡箔」という言葉とともに「慶長小袖」を論じている。また近年の研究においては、今永清士氏らの研究を踏襲した河上繁樹氏や丸山伸彦氏の論考がある一方で、長崎巖氏の「繡箔」「地無」双方が「慶長小袖」という言葉の江戸時代の呼称であるという考え方もあり、後で論ずる言葉の結びつきの研究の中での考察すべき点であろう。

## 3. 「地無」と「繡箔」という言葉の使用について

そもそも文献において「地無」と「繡箔」という言葉はいつ頃から使用されるようになったのであろうか？ 江戸時代初期の不確定な時期に、それらの言葉が使用されていたのか否かを知る手掛かりに『日葡辞書』<sup>6)</sup>という文献がある。これは、慶長8年（1603）より前に日本に来たポルトガル人が、その来た時点で日本にあった言葉をポルトガル語で紹介したもので、その後、復刻版の発刊や、研究されて索引集なども出版されている。その結果、ポルトガル語の解説が難しくとも、言葉を調べていくことができる。また、この『日葡辞書』はそれぞれの分野で研究され、染織・服飾分野でも活用されている<sup>7)</sup>。先行研究において『日葡辞書』における「繡

箔」は加飾を表す言葉である「縫箔」として紹介されている<sup>8)</sup>ため、この言葉が慶長8年（1603）より前から使用されていた言葉と知ることができる。逆に「地無」という言葉は索引集をもとに検証すると見出すことができない。この事実だけで、「地無」の言葉の始まりを検討することはできないが、筆者は現段階において、この『日葡辞書』の中での言葉の意味を研究することはできないのである。

## 4. 江戸時代初期における文献上の「地無」と「繡箔」という言葉

現在、「慶長小袖」の製作時期、着用時期などは確定されていないものの、先行研究などでは、慶長期に製作され流行ったものではないとされながら、おおよそ、江戸時代初期や寛永期や元和期から寛文期前までを軸に論じられている。そこで、文献上において、特に「慶長小袖」が製作された江戸時代初期とされる慶長期を中心に「地無」と「繡箔」という言葉が、どのように使われたのかを考察する。検討の対象にする文献は以下の2件である。

- ①雁金屋資料（慶長7年（1602）から延宝6年（1678）までの呉服発注の記録である）
- ②藤本箕山『色道大鏡』<sup>9)</sup>（寛永3年（1626）から宝永元年（1704）内に成立）

### 4-1. 雁金屋資料における考察について

雁金屋資料とは、絵師尾形光琳の生家で、呉服商であった雁金屋の呉服発注に関する資料群の一部である。この雁金屋資料は一般的に「小西家旧蔵光琳関係資料」あるいは、「雁金屋資料」として現在の研究者に知られ、研究されている。この資料群は、絵師の尾形光琳の子が養子に行った先の小西家に伝来した画稿類と文書類である。この資料は光琳の写生帳や画稿など光琳にまつわる資料と光琳の生家の職業である呉服商雁金屋関係のものと光琳を中心にその家族関係などを記したものである。

これらの資料の存在が初めて紹介されたのは、光琳二百年忌に相当する大正4年（1915）より後であるといわれ、相見繁一と福井利吉郎により光琳研究が始まった<sup>10)</sup>と伝えられている。昭和9年（1934）頃、これらの資料は小西家から武藤山治氏を経て、現在は京都国立博物館に所蔵されている。またこの段階で小西家の手を離れなかったものは現在、大阪

市美術館に所蔵されている。光琳資料の研究は東京大学文学部美術史研究室の山根有三氏が昭和36年(1961)に成果として『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』<sup>11)</sup>を出版、その結果、光琳研究のみならず、呉服発注という視点での服飾・染織研究者からの研究も始まることとなった。また、この後、塚本瑞代氏により、この中の呉服発注における注文書の内容を生地や文様や技法を分析する研究がされ、それが、『雁金屋御画帖の研究』<sup>12)</sup>として出版されている。

山根有三氏の『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の中で「I 尾形家 家職(呉服商雁金屋)」に関するものは全部で42件ある。それを一覧にするとTable 2となる。その中で、発注した呉服の内容がわかる部分は以下である。

- ① 1. 慶長7年(1602)『雁金屋染物台帳』
- ② 5. 慶長19年(1614)『徳川秀忠大奥老女呉服注文書』
- ③ 8. 発行年不明『徳川秀忠大奥老女呉服注文書』
- ④ 23. 発行年不明『徳川秀忠大奥呉服注文書』
- ⑤ 24. 元和9年(1623)『雁金屋女御和子(徳川和子)御用呉服書上帳』
- ⑥ 34. 発行年不明『後藤縫丞呉服注文書』
- ⑦ 35. 発行年不明『若君呉服注文雛型及寸法控』
- ⑧ 36. 正保3年(1645)『尾形宗謙呉服詠物帳』
- ⑨ 37. 発行年不明『呉服注文書』
- ⑩ 38. 万治4年(1661)『衣裳図案帳』
- ⑪ 39. 寛文3年(1664)『衣裳図案帳』
- ⑫ 40. 発行年不明『衣裳図案帳』
- ⑬ 41. 延宝6年(1678)『雁金屋東福門院御用呉服書上帳』

の13件である。

これらは、森理恵氏らの過去の研究<sup>13)</sup>により解説され解明されている。この雁金屋に小袖などを発注し、着用した人達は豊臣家や徳川家の人々である。「着用者のうち、「特定できた人物は男性では徳川家康、徳川秀忠、豊臣秀頼、女性では、注文に際しての中心的人物と思われえる江戸様(徳川秀忠正室)、若狭様(京極高次正室)、大坂御上様(豊臣秀吉側室であり通称淀殿と呼ばれる人)の三姉妹、江戸様の娘である御姫様(千姫、のち豊臣秀頼室)、政所様(豊臣秀吉正室)である」<sup>14)</sup>とされている。こ

れらを年代順に呉服発注書の中で「地無」と「繡箔」という言葉を抜き出し、それらがどのように取り扱われているのかを考察する。この13件の中で「地無」と「繡箔」という言葉が使われている文書を抜き出すと以下である。

- ⑤『徳川秀忠大奥老女呉服注文書』内の5つめに

御たけはいつものことく4しやく  
ミたいさま 御ふく 十たん 此内  
一御そめ物 御ちなし 五つ  
一御かたすそ 三つ  
一御四つかわり 二つ  
いかにもいかにもこからに<sup>15)</sup>

この「ミたいさま」は徳川秀忠正室お江与で丈が4尺の服を10反注文し、その中の5つが「地無」であるということがわかる。

- ④『雁金屋女御和子(徳川和子)御用呉服書上帳』の5～6ページに

(5ウ)  
女御様御ふく  
一 御ちねりの 御そめ物 壹たん  
御ゑやう御ちなしそう十九たん二してだんきわ  
いかり御へにのけしかのこしろ御かたの  
うちこし御すそもかのこ  
代銀貳百七十め  
一 御へにもそめはふたへ 壹たん  
是ハ右之御うら  
同八十目

(6オ)  
同御ふく  
一 御地ねりの 御そめ物 壹たん  
御ゑやうハ御ちなしそうけしかのこ十六たん二して  
だんぎわいかり二して一たんハくろへにのけしかのこ  
一たんハあかへにのけしかのこ一たんハひわのけしかのこ  
一たんハあさきのけしかのこ  
代銀三百十匁  
一 御へにのそめはふたへ 壹たん  
是ハ右之御うら  
同八拾目<sup>16)</sup>

である。これは、元和9年(1623)の「雁金屋女御

Table 2 List of the hereditary business of the Ogata family (Kariganeya kimono shop)

	時期	内容	用途	地無・練箔の言葉	
				地無	練箔
1	慶長7年	雁金屋染物台帳	注文		
2	慶長15年	雁金屋受取書控	受取		
3	慶長17年	徳川秀忠大奥老女刑部卿呉服支払書	支払		
4	不明	徳川秀忠大奥老女刑部呉服支払書	支払		
5	慶長19年	徳川秀忠大奥老女呉服注文書	注文	有	
6	元和1年	徳川秀忠大奥老女刑部呉服支払書	支払		
7	元和2年	徳川秀忠大奥老女刑部呉服支払書	支払		
8	不明	徳川秀忠大奥老女呉服注文書	支払		
9	元和3年	徳川秀忠大奥老女刑部呉服支払書	支払		
10	元和5年	徳川秀忠大奥局呉服支払書	支払		
11	元和6年	徳川秀忠大奥局呉服支払書	支払		
12	元和7年	徳川秀忠大奥老女刑部卿呉服支払書	支払		
13	元和7年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
14	元和7年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
15	元和7年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
16	不明	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書包紙	支払		
17	元和8年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
18	元和8年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
19	元和8年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
20	元和9年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
21	元和9年	徳川秀忠大奥老女民部卿染物代支払書	支払		
22	元和9年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
23	不明	徳川秀忠大奥呉服注文書	注文		
24	元和9年	雁金屋女御和子御用呉服書上帳	注文	有	
25	元和10年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
26	元和10年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
27	寛永1年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
28	寛永1年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
29	寛永2年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
30	寛永2年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
31	寛永2年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
32	不明	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書包紙	支払		
33	寛永3年	徳川秀忠大奥老女民部卿呉服支払書	支払		
34	不明	後藤縫丞呉服注文書	注文		
35	不明	若君呉服注文雛型及寸法控	注文	有	
36	正保3年	尾形宗謙呉服詠物帳	注文		有
37	不明	呉服注文覚	注文		
38	万治4年	衣裳図案帳	注文		
39	寛文3年	衣裳図案帳	注文		
40	不明	衣裳図案帳	注文		
41	延宝6年	雁金屋東福門院御用呉服書上帳	注文		
42	延宝6年	雁金屋宗謙東福門院御用書上残控	注文		

和子（徳川和子）御用呉服書上帳」である。徳川和子は、徳川2代将軍秀忠とお江与の娘で、慶長12年（1607）、後水尾天皇へ入内し、東福門院となり、朝廷と幕府の架け橋となっている。そして、豊かな経済力をもとに、数多くの小袖類を雁金屋に発注をしている<sup>17)</sup>。この注文書には45点の小袖と14点

の反物を注文し、代金の総額は七貫八六四匁となっている。この元和9年(1623)の「雁金屋女御和子(徳川和子)御用呉服書上帳」での「地無」について特筆すべきことは地が練緯であることである。桃山時代の小袖の地に多く使われた練緯が元和年間にも使われ、鹿の子が多く使われていることを読み取るこ



とができる。ただ、この「地無」は何を指しているのだろうか？ 練緯の地に現在の「慶長小袖」の技法を駆使した染織品を実見したことがない為、この「地無」が、先行研究や現在において論じられている地がないほどの加飾をするという意味を持つ言葉なのであろうかという疑問が残る。

③⑤『若君呉服注文雛型及寸法控』には

(一)

若君様正月の御服

一御地なしに、あやすきこんともえき浅き  
しるに、てきわよくうつくしくそめ候へく候、  
大からにもこからにもなきように、  
はからい候へく候、そめ候へく候、上もん  
いちやうのはをちらし、これもいろいろ  
きひわのそめ候へく候、御もん所あふひの  
丸そめ入り二、うつくしくそめ候へく候、<sup>18)</sup>

このひな形の「地無」は何をさしているのだろうか？ 生地についてかかれていないので白に紺と萌黄を美しく染めるとあり、大柄にも小柄にもならないようにとある。この『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の中で「I 尾形家 家職（呉服商雁金屋）」においては「地無」は以上の3つの文書の中のみにある。これらにおいて加飾の技法は鹿の子、あるいは、染めとありこれらにおいては刺繍については書かれていない。箔についても書かれていない。そう考えると、この3つの文書の中の「地無」の意味は「繡箔」とはならない。

一方で『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の中で「I 尾形家 家職（呉服商雁金屋）」の中での「繡箔」は、その後の正保3年（1645）の「尾形宗謙呉服詠物帳」の中でみられるようになる。

③⑥『尾形宗謙呉服詠物帳』には

(16ウ)

とら卯月十五日

一、四百廿め りんす地へ二ゆいしはノそめ  
ぬいはく 壺たん  
一、三百五十め りんすちへ二あんへうのそめ  
ぬいはく 壺たん  
一、三百め りんすそつきしまむすひ  
ふミノ左まきすしそめ物一たん  
あやさま御用

とり

一、廿八匁 りんすこたちちべにたううちはちらし  
あさき丸へにうこん糸もんぬいはく  
一、六匁五分 ぬい 一、三匁 へに 一、一匁五分下へ  
一、一匁八分 かのこ 一、二匁五分はく、一、一匁八分しめ物  
一、二分 あをや 一、四分 けし 一、一匁うこんそめ  
合十八匁七分  
一、四十二匁 りんすちへにきつかうちらしへにかのこ  
うこんしろぬいはく  
一、三匁 ぬい 一、二匁 はく 一、三分 けし  
一、二匁 かのこ 一、一匁五分下へ、一匁二分 ほし  
一、廿五分匁五分へに 一、四分しめ物 一、五分 うこん  
合卅六匁四分

(17ウ)

十二三ノ御子 これハ一たん御地下され候  
りんすちしろからはなちらし  
へにのかのこ二あさきかのこうこんはないろ  
一、ぬいはく  
一、五匁下へ 一、四匁 はく  
一、三匁 けしふた 一、廿めかのこ 一、四匁しめ物  
一、三匁五分てま うこん入 一、十三匁 ぬい  
合五八匁八分  
一、りんすちうこんはうちはかさね  
へにかのこあさきかのここんしろぬいはく  
一、七十五匁ち 一、四匁二分しめ物 一、十三匁五分はく  
一、五匁 下へ 一、一匁二分あをや  
合百卅四匁九分  
一、三匁けしふた 一、十匁 うこん  
一、十八匁かのこ 一、五匁 てま

(中略)

(18ウ)

かがの女子地下され候  
一、卅三匁 かたひらへに立あふひちらし  
へにかのこぬいはく  
一、二匁 こんや  
一、一匁 下へ 一、一匁五分 はく  
一、五匁 ぬい 一  
合九匁五分<sup>19)</sup>

以上のように「地無」と「繡箔」という言葉を「雁金屋資料」の中で考察すると、徳川秀忠正室の衣服注文の中に「地無」という言葉を見出し、これは、「かたすそ」（肩裾）や「四つかわり」（四つ替り）という文様構成であるが、「地無」がどのような文様構

成であるのかを見出すことはできなかった。「若君様」の雛型に書かれた「地無」も同様であった。ただ、「地無」の染織品の生地が練緯であった時期があったことも見出すことができた。一方で「繡箔」という言葉は正保3年(1646)の注文書の中にある。それは、染めなどと同列で書かれていることから技法と読み取ることができる。また、この注文書に書かれた生地は綸子である。さらに延宝6年(1678)年の「④雁金屋東福門院御用呉服書上帳」には、「地無」、「繡箔」という言葉を見つけることはできなかった。さらに、『小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究』の中で「I尾形家 家職(呉服商雁金屋)」には詳細が掲載されていないが、その後の研究として知られる『雁金屋御画帖の研究』で万治4年(1661)と寛文3年(1664)他1冊の『衣裳図案帳』という3冊についても研究がなされているが、それらの中にも「地無」、「繡箔」という言葉は見出すことができない。これは、「慶長小袖」の下限を「寛文小袖」の出現する前としていることにつながるであろう。

#### 4-2. 藤本箕山『色道大鏡』(寛永3年(1626)から宝永元年(1704)内に成立)<sup>20)</sup>

次に、『色道大鏡』という藤本箕山という古筆鑑定家が遊里といわれる当時の遊郭に通い書かれた遊里百科事典の中にも「地無」「繡箔」という言葉がでてくる。「第三冊 おほ鏡 寛文式上」には大夫の職の衣服の事で、「第四冊 おほ鏡 寛文式下」には、法度により普段は着用が不可と書かれている。

##### 第三冊 おほ鏡 寛文式上

##### 太夫職可差用色

小袖・帷子によらず、ひつたの鹿子○地なし縫薄の小袖○縁箔の小袖、但、薄の類 六条にてはおほく着しつれど、坤郭にいたり、傾國の服には初心なりとて、これを着せず。殊更當時は鹿子・縫薄之類停止すれば、其沙汰に及ばず。長崎には今以これを用ゆ。○無紋無地の紫紋所あるは天職着してもくしからず。○無紋白小袖の上着肌着・ね巻には天職・園職共にくしからず。○同色の三重○小袖の裏の小紋箔、八丈八端掛○天鷲戒の小袖○夜具には、○唐織金入○欄絹○天鷲戒○金入りの小寝巻○敷敷、四隅の糸房○錦縁の折御座、又は金入ひらうとの縁。蚊帳は、○たうか○ろりん○ろけん○ほら○四天・ち

へりは錦織、或は金入織物のしつ○釣手、むらさきの唐打、七寶の輪釣手○織物の枕掛○金覆輪の指櫛<sup>21)</sup>

##### 第四冊 おほ鏡 寛文式下

一退郭之事。郭をしりぞく事也。傾城、年季をととげ、主人より暇をもらひ、舊里に歸るをいふ。又、年季の内に金銀を出し、身請して出るをもいふ。傾城の歸る時、衣裳・寝具残らずくるゝ事、其家の例によるべし。衣裳ことごとく遣すもあり、又、品によりて少しもとらせぬ事もあり。又、其傾城年比のはたらきにより、おほくも遣し、すくなくとも遣すも有べし。傾城退郭の用法、

借銀・買がゝり等の拂方、遣女是を承る處なり、退出一日まへに拂切べし。退郭きはまりて用意の内に、退出の日着する衣服を仕立てる事勿論也。是には何にても郭中法度にて着せざりし物を矩模とす。即、施主の男よりこれを出す、小袖三、或は五、内一は白むく。又、日頃參會せし外の客より、餞別として送る小袖も有へし。たとひ外より数多来るとも、施主よりは必用意する法也。家主より退出する傾城へ、餞別として新服を出す、或二、或一、其女郎の器量によるべし。是も平生法度にてきせざりし物を仕立てる事也、たとへば、鹿子・縫薄之類たるべし。わたぼうしはうなきわた<sup>22)</sup>、まるわた<sup>23)</sup>、主人よりかならず出す故実なり。此外の餞別は、主人の心心によるべし<sup>22)</sup>

以上を考察すると、『色道大鏡』においては「地無縫箔」の小袖という表現をしていることから、「繡箔」による加飾を「地無」となるように施した小袖を指しているのであろう。

#### 5. 江戸時代出版された随筆などに描写された「地無」と「繡箔」という言葉について

「慶長小袖」の製作・着用時期以降である江戸時代中期以降に出版された随筆の中で、それ以前の女性の衣服について書かれた箇所「地無」「繡箔」という言葉が使われているものがある。それらを考察することにより、江戸時代中期以降のさほど年月を経てない時期や江戸時代後期などに、どのように「地無」「繡箔」という言葉が使われていて、何を表現しているのかという視点で考察する。対象とする文献は以下の4冊である。



- ①財津種蒔『むかしむかし物語』<sup>23)</sup> 享保17年(1733) 発刊
- ②津村正恭『譚海』<sup>24)</sup> 寛政7年(1795) 発刊
- ③山東京伝『近世奇跡考』<sup>25)</sup> 文化元年(1830) 発刊
- ④喜田川守貞『近世風俗史(3) 守貞謾稿』<sup>26)</sup> 天保8年(1837) 発刊

#### 5-1. 財津種蒔『むかしむかし物語』享保17年(1733) 発刊

これは、享保17年(1732)、財津種蒔(たからつしゅそう)という人が残した随筆『むかしむかし物語』と伝わる文献である。書いた時、80歳に達していたと伝えられる。そこから類推すると出生は慶安年間(1648～1651年)頃ではなかろうかと考えられる<sup>27)</sup>。財津種蒔は、長らく見つめてきた江戸の風俗の変遷についてこの随筆の中で述べている。

この『むかしむかし物語』の中では「地無」が2か所「繡箔」は1か所で確認ができたので、そのまま下記に引用する。

○むかしは、奥方御息方、神社仏閣に詣での時さげ髪、供侍上下を着す、女中の帯長さは七尺五寸也、また緞子縹子の帯も七尺五十六成し、半女は木綿金入りとて、木綿を織たる金入帯にて有し、寛文の末よりはば広に成て、延宝の頃専ら幅広に成、純子三ツ割二ツ割帯にて、長さ一丈式三尺になる、費事也、昔は女中地なしを着す、<sup>28)</sup>

○むかしは女風俗近年と替り、小袖のもやう十五六歳の女は其歳頃のもやう、四十五歳の女は年相応の模様、五十以上の女は後室向を着し、道を歩行にも其年倍の様子にあゆみ、帯の物好も其頃々々相応のをするにより、五人十人連立て歩行を見れば、小袖の模様帯の様子道の歩行やう、夫々年頃々々に見ゆるゆへに、若輩なるも中年成も老女も、只しても取なり風俗にて、老若の分け明らかに、遠く隔てても見えしが、近年は十四五の振袖も十七八も、三十四十も老女も、皆々郡内島か或は八丈島か又丹後島、紋所物扱は無地、似たか似ぬ位の小袖、帯は幅広みなみな胸高に尻長長と出し、あゆみやうはどたとと身品もなくあゆむゆへ、遠隔りて群行を見れば、何が若きやら何が老女やら、中々見わけ難し、是は女ながら器量なき故、皆人の真似ゆへなり、小袖紋所無地島るいはやるは遊女の真似なり、むかしは常の女縫

薄光る小袖着るゆへ、遊女無地もの島のるい着て、常の女と風替るべき為也、又帯も常の女帯は幅狭き故、遊女ははば広して是もわかるべき為なりしに、今は常の女遊女の真似して、無地物島の小袖幅広の帯になりし、皆是人真似器量なきゆへ也、<sup>29)</sup>

○六七十年以前は、女中地無と云小袖もたざる人なし、人をも仕ふ女中、上着小袖数持つ共地梨は持、惣身を金薄にて、一面に松皮菱の様に薄置たる小袖なり、針妙女も衣装五つ六つも持たる程の女、又は小身にても家老の妻なども地なし持も有、此地なしといふは、祝言婚礼また正月など、とかく男の髪斗目着する時女は地なしなり、其頃の針妙はかつぎを着る、<sup>30)</sup>

この『むかしむかし物語』の中での「地無」については着用についてであるが、昔の女中の衣服、日常の女の衣服であるとしている。一面に松皮菱のような箔を置いているものである。あるいは、婚礼や正月などに男性が髪斗目を着用するときに同席する女性は「地無」を着用すると述べられている。また、「繡箔」について遊女は着用しなかったと述べられている。この随筆の中で「地無」「繡箔」ともに遊女ではない、女中などの着用する衣服である。むかしは「地無」と光る「繡箔」とわけて述べられているが、推測するに、この随筆が書かれたであろう享保17年(1732)から昔ととらえた60～70年前はおそらく明暦か万治(1655～1660)の頃であろう。「地無」に箔による加飾が施されていることが読み取られ、文章だけではそれが「繡箔」とはわからないものの「地無」に箔による加飾による小袖が製作されていたと考えられる。

#### 5-2. 津村正恭『譚海』寛政7年(1795)

この『譚海』という随筆は大正6年(1917)国書刊行会から全集が出版されている。この随筆が出版された時点の序に『譚海』を書いた津村正恭と書かれた時期などについて書かれている。津村正恭は江戸時代の歌人でこの『譚海』は40歳の頃に書き始めて60歳の頃寛政7年(1795)にすでに20年の歳月を費やして書いたことや、文化3年(1806)に亡くなっているとのことである。この『譚海』の14の巻に衣服のことが書かれている。縹子や綾などの生地のことや鹿の子などの説明である。その中に

○縫箔は地なしとも云、雪鳥の模様に、さまざまのようを箔にてすり、其地を花鳥をぬひ、其あひだにくし染をして、もえぎ・べに・あい・かちんのくしいろの間、ちを箔にてすり、くるりにして、少しもぢにあかねほどに、模様を付る、<sup>31)</sup>

とあり、「縫箔」は「地無」ともいうとあり、そのことばが、比較的大きな意味をもち、大きな意味で取り扱われているのであろう。例えば、着物を着るものと、和装の着物のような大きな意味でイコールとされているのではなかろうか？

### 5-3. 山東京伝 近世奇跡考 文化元年(1830) 発刊

また、文化元年(1802)、山東京伝による随筆『近世奇跡考』にも「地無」「繡箔」はでてくる。山東京伝は、戯作者や、浮世絵師北尾政演としても知られる人である。洒落本作家として人気を得るものの、御禁令を犯し処刑されたのちに洒落本から筆を立ったのち、読本に転じた。風俗研究により『近世奇跡考』は生み出された。この随筆は大きく5巻からなり、その中で計71条に分かれている。その第1巻[3]に縫箔の小袖と題して書かれている。この部分を下記に引用する。

#### 縫箔の小袖

昔の婦女は、縫箔の小袖を礼服とす。京六条に傾城町ありし時、寛永の頃までは、遊女も地なしの縫箔の小袖、へり箔小袖のを着たるが、島原にうつりしより、縫箔とひつた鹿子を禁ざれしよし、箕山が〔大鏡〕〔割註〕延宝中写本。に見ゆ。好事の者、懸物のかざりなどに用いて、今に残れるを見るに、絹に亀略なる縫いをして、ところどころ摺箔をしたるものなり。今地白地黒など云もの、其遺製歟。いつの頃にか、金糸の繡いできて縫箔はやみ、唯縫箔屋と伝名のみ残れり。〔割註〕古代といへども、縫箔はなみなみの者の、着すことあたはざる衣服なり。しかれどもおほくは絹の地にて、縫いも甚だ亀略なり。これ等を見ても、昔の質素をおもふべし<sup>32)</sup>

「繡箔」は昔の婦女の礼服であり、遊郭が六条にあった頃は、「地無」の「繡箔」の小袖を着ていたが、

禁令により「繡箔」が禁じられ、箔は金糸に変わっていく様子がわかる。また、山東京伝がそれ以前に出版された『色道大鏡』を参考に行っていることや、「繡箔」を図版で紹介していることなども特筆すべきことであろう。この随筆によると「地無」という様式に「繡箔」の技法ということがわかり、「繡箔」の中に「地無」という地の無いほどの加飾をした小袖があったことが読み取れる。

### 5-4. 喜田川守貞『近世風俗史(3) 守貞謄稿 天保8年(1837) 発刊

また、天保8年(1837)、喜田川守貞による『守貞謄稿』にも「地無」「繡箔」という言葉がでてくるので引用する。

繡箔・摺箔ともにその模様種なりといへども、おほむね図のごとし。縫箔には、散楓を五彩の絲をもつて繡とし、波を金箔あるひは銀箔とするの類、あるひは虫食いの楓を箔にするの類なり。その好みに任す。摺箔には縫を用ひず、無地の上に模様、皆すりはくにし、あるひは染もやうをも交へ、すりはくにし。また地色も定まりなく、綸子・平絹を用ひ、あるひは染模様を除きて地を全く摺箔にするもあり。

また、縫箔と云う縫は繡の仮字なり。縫は裁縫の字なり。箔また仮字なり。箔、すだると、訓ず。簾の類なり。金銀には鉑を正字とす。

繡箔小袖は昔の婦女の礼服とす(箔は今云ふ印金の類、すりはくなり)。寛文の末年廃して金絲縫の製始まる。箔小袖をあるひは地なしの小袖とも云ふ。平絹に彩糸をもつて所々に繡し、その間に摺箔をしたる物にて、今の地白地赤と云ふその制の本なれども、今の制よりははなはだ僞なり。その箔衣も、正保・慶安頃までは自から制せず、市民の子女等大名以下武家に仕えて、その主人より、一、二領賜ひしを、婚儀および他出に服し衆目を驚かす。富家の妻女等、これを観て自費をもつて製するに至りしなり。その箔衣も廃して金絲繡を用ふるに至る。京の傾城町も六条柳馬場にありし時は、遊女も地なし縫箔へり箔の小袖を服す。島原に移る後、縫箔およびひつた鹿子の服を禁止す<sup>33)</sup>。

この書籍は一般的に近世風俗史の文献とされている

る。江戸・大阪・京都の風俗を比較して論じている。その中の「女服」の中に繡箔および摺箔の図を紹介し、その説明が書かれている。「繡箔」については現在においても混在して使用されている「縫」「繡」の文字の説明や「繡箔」の技法について述べている。また、「縫（繡）箔」は昔の婦女の礼服で、六条の遊郭があった頃は遊女が「地無縫箔」を着ていたと述べている。

## 6. 明治以降の染織史研究における「地無」・「繡箔」という言葉について

明治以降において近代染織史やその研究史がいつ、どの時点からはじまったのかについては解明されていないが、大正年間の出版物に時代判定がされた文献などが見出しているため、明治時代にそのはじまりがあると考えられる。そこで、時代判定がされた頃、染織・服飾を取り扱った文献を中心に、「地無」「繡箔」という言葉について考察する。そして、どの時点で江戸時代の「慶長小袖」の呼称であるとされる「地無」・「繡箔」という言葉と結び付けられていくのかを検証する。

### 6-1. 大正時代の文獻

大正時代に入ると染織品の時代判定などをし、染織品の図版とともにその時代判定が掲載される<sup>34)</sup>ことになる。大正時代に発刊された染織品を掲載した出版物の中で『慶長風俗展覧会図録』<sup>35)</sup>が染織品の「慶長小袖」のカラー図版とともに掲載された文献であるものの作品名称は慶長時代小袖と紹介されているため、検証は難しい。しかし、大正9年(1920)、染織品コレクターとして知られる野村正治郎の『友禅研究』<sup>36)</sup>に小袖を中心とした染織品についての論考の中に「縫箔小袖」という節があるため、この部分を考察する。野村正治郎によると室町時代末期頃摺箔と刺繍の応用が始まり、徐々に進化した<sup>37)</sup>とされる。さらに「慶長時代の縫箔は専ら黒であつたが此時代からぼろし染法に依りて白に抜き、紅、浅黄或は藍などが染入れられた」<sup>38)</sup>とあり、このことは、野村正治郎が自身の染織品を『慶長風俗展覧会図録』の中で自身の考えのもとに時代判定をしている<sup>39)</sup>ことにもつながると考えられる。また、野村正治郎はこの著書の中で「慶長元和寛永時代には、京都の上流階級の妻女は勿論、六條三筋町の傾

城なども縫箔或は鹿の子のきは箔（又はへり箔とも云ふ）等の小袖を着た<sup>40)</sup>」と述べている。『むかしむかしものがたり』『守貞漫稿』『近代奇跡考』の文献を紹介している。ここで、野村正治郎の「縫箔小袖」と「地無小袖」について紹介する。

江戸に此等縫箔小袖の流行を来たしたのは慶安四年家光の薨去とともに大奥の女中三千七百餘人を一時宿下げとしたるに起因する。此等大奥の女中は多く江戸者であつたから、宿下りと同時従来着用した地なし小袖を、是れみよがしに着て晴着とした<sup>41)</sup>

と述べている。ここで、野村正治郎は「縫箔小袖」の流行について言い始め、その言葉を文中で『むかしむかし物語』で使われている「地なし小袖」という言葉を同等に取りあつかっている。これらを総じて、京都で慶長から寛永頃着られていた縫箔が慶安頃江戸の市中で着用され、これを野村正治郎は「地なし小袖」と結び付けている。

また、野村正治郎とともに注目すべきは風俗研究家の江馬務であろう。大正5年(1916)3月に研究会を発足させ、研究し続けた。これらの研究結果は、昭和32年(1957)新潮社より『江馬務著作集』<sup>42)</sup>というタイトルで出版された。その中に「地無」と「繡箔」については「婦人小袖は、礼服に地無という摺箔入りのものがあり、鹿子刺繍を多く入れた。のち摺箔は繡箔という金糸入りとなり」<sup>43)</sup>と述べている。

これらを総じて考察すると大正期の「地無」や「繡箔」という言葉は江戸時代の随筆などを探した上で検証し、それらの言葉についての一定の考察がなされていることがわかる。大正期には筆者が見出した染織品の「慶長小袖」が言葉である「慶長時代小袖」あるいは「小袖（慶長頃）」といった時代判定の痕跡は確認できるものの、「慶長小袖」という言葉は文献上において確認ができない。よって、大正時代において、この「地無」と「繡箔」という言葉と「慶長小袖」と「慶長小袖」という言葉は結びつけられてはいないのであろう。

### 6-2. 昭和戦前期

戦前までは、明治以降始まった古美術品の売立なども盛んに行われ、染織品の流動もおなじであった。売立目録においては図版を掲載し、時代判定をし、



染織品にも名称がつけられた。そのため、売立目録にも「地無」や「繡箔」という言葉はでてくる。また、洋画家の岡田三郎助による『時代裂』などの書籍が出版され、染織研究がなされていた。ここでは、昭和戦前期の出版物の中で現在、「慶長小袖」といわれる染織品がどのように考察されているのかを「地無」「繡箔」という言葉をキーワードにして検証する。

現在、「慶長小袖」と呼ばれる染織品の中で、紅・白・黒紅で染分、繡箔という技法を使用し製作された染織品は以下の3点である。

- ①旧鐘紡コレクション「小袖〈繡箔風景四季花文〉」
- ②田畑コレクション「染分風景花卉模様繡箔小袖」
- ③松坂屋コレクション「染分綸子地御所車花鳥文様繡箔小袖」

この中で①と③は昭和戦前期の文献に図版とともに掲載されている。①については昭和10年(1935)に『時代裂拾遺第六輯解説』<sup>44)</sup>の33・34に「縫箔四季模様慶長裂」として、その後、昭和17年(1942)11月開催の東洋美術国際研究會主催の「時代衣裝展観目録」<sup>45)</sup>という図録の図版5に「綸子地 染分四季花鳥文様縫箔小袖」という作品名称で掲載されている。また③は昭和4年(1928)に出版された『綵霞帖』<sup>46)</sup>に

徳川時代 初期 慶長頃 小袖 縫箔  
本紋綸子地 朱、茶、藍、黒ニテ種々ノ形状ヲ  
紋リ鹿ノ子ヲ加へ  
刺繡ハ鳳凰ニ御所車、枝桐、秋草、水禽ニ水草等  
又茶地ノ處ハ様々ノ文様ヲ摺箔ニテ現ス

とある。この後、昭和8年(1932)に出版された、『日本染織商工史』<sup>47)</sup>の口絵に「紋綸子地紋縫摺箔御幸文様小袖(徳川時代(慶長頃))」と紹介されている。この2つの考察から、戦前期は「繡箔」は「縫箔」とされ、「慶長小袖」は「繡箔」ととらえられていたのではなかろうかとかんがえられる。

### 6-3. 戦後の研究

戦後において、いつから「慶長小袖」の江戸時代の呼称が「地無」「繡箔」という言葉と結び付けられたのであろうか？ 戦後の染織研究史がいつから始まったのかは定かではないが、東京国立博物館を

中心に研究がすすんでいる<sup>48)</sup>。東京国立博物館から発刊された MUSEUM などを中心に「慶長小袖」と江戸時代の呼称とされる「繡箔」と「地無」について考察し、その言葉が結びつけられていく様子を明らかにする。

まず、戦後の研究者で一番初めに「慶長小袖」について、東京国立博物館の今永清士氏が旧鐘紡コレクションの「慶長小袖」と言われる「小袖〈繡箔風景四季花文〉」について論じている。「俗にこれを慶長小袖と呼んでいるが、絞りと刺繡、それに摺箔で全面を隙間なく埋めつくし、一見、地が見えないくらいに模様が施されているので地無し小袖ともいわれている」<sup>49)</sup>とあり、この中で染織品の「慶長小袖」と「慶長小袖」という言葉と、それが別名「地無」という小袖であることを述べている。また、続いて、山辺知行氏も「桃山の終わりから江戸初期にかけ、俗に慶長小袖といわれる独自のスタイルをもった小袖が現れる」<sup>50)</sup>とし、「この種の小袖を一名地無しと称するもの、絞りと繡と箔で裂地の全面が埋められて地が見えぬくらい詰っているという意味であろうか」<sup>51)</sup>と論じ、今永清士氏と「慶長小袖」と「地無」という言葉については同じ考え方である。さらに、北村哲郎氏は「慶長小袖」を「慶長繡箔」と定義し、「地無」についての記載はない<sup>52)</sup>。また、徳蔵きみ氏も「刺繡と絞りそれに摺箔によって飾られたスタイルのもので既存の技法をすべて駆使しているもので、このような小袖を一名「地無し」と呼んでいる」<sup>53)</sup>と論じている。また、河上繁樹氏も田畑家所蔵の「染分風景花卉模様繡箔小袖」をいわゆる「慶長小袖」とし、俗に「地無」小袖と呼んでいる<sup>54)</sup>ことを論じている。ここまでの論考を考察するに、染織品の「慶長小袖」が「慶長小袖」という言葉と結び付けられており、「慶長小袖」という言葉の確立を確認できる。そして、この「慶長小袖」が「地無」という言葉とも結びつけられている。また、丸山伸彦氏も「「慶長小袖」は紅・白・黒紅の染分、複雑に重層した構成、刺繡・絞り・摺箔等によって細密に表現された花鳥・草木・器物・風景などの模様を特徴とする“地無”の形式を踏襲」<sup>55)</sup>しているという。一方で、山内まみ氏と片岸博子氏は「慶長小袖」を筆者も考察した『雁金屋資料』や『むかしむかし物語』『譚海』などを考察し、慶長小袖を摺箔の地無ととらえている<sup>56)</sup>。これらの研究から、「慶長小袖」が「繡箔」、「地無」という言葉と一緒にと

りあつかわれるようになったと考えられる。

また、近年、研究が小袖様式や着用者などが細かく細分化される中で、「慶長小袖」も着物の変遷を紹介する出版物などで紹介されることが多くなった。「慶長小袖」という言葉の指し示す染織品は研究者においてまちまちだが、染織品の「慶長小袖」を「慶長小袖」か否かという観点では、研究者の考え方はおおそ共通である。ただ、「慶長小袖」を「繡箔」「地無」と結びつける研究も研究者によりまちまちである。丸山伸彦氏の「刺繍を中心に金銀の摺箔を併用する技法は、基本的に桃山期の延長上にあり、「慶長縫箔」とも称される。また、地が見えなくなるほど密の装飾を施すものは「地無小袖」とも言われる」<sup>57)</sup>というそれぞれの意味をわけているものと、長崎巖氏の「地がみえないほどにぎっしりと模様が表されているものが多いので、江戸時代には「縫箔小袖」あるいは「地無小袖」と呼ばれていた<sup>58)</sup>」という考え方が存在する。それは江戸時代の文献にも、同じようなことがみられた。

## 7. まとめ

これらの文献から、「地無」と「繡箔」について考察できたことは、「地無」には「鹿子」「繡箔」などの技法の意味も含め使われることである。調査した文献のみでも多くの考察を見出すことができた。

まず、「地無」であるが、生地においては、「雁金屋資料」においては練緯であることが考察できるが、他の『色道大鏡』や『むかしむかしものがたり』以降は綸子や綾であろうと考えられる。ここで考えられるのは、「地無」の言葉のさすものが双方で違うのか、あるいは練緯地の地が無いほど加飾をした染織品を現在遺された染織品で実見することができないから違和感を感じたのかもしれない。いずれにおいても練緯地の「地無」については今後も研究を続けたいが、現状においては言葉の指し示す意味は定かでない。さらに、『守貞漫稿』では、「地無」には箔を使用しない総模様もさしている。そして、「地無」の意味は、その間に出版された文献のなかではある一定の意味をみいだすことができる。先行研究にて論じられている地がみえないという意味であろう。また、この「地無」の着用者に関しては、女性と若君様の頃もあったが、おおそ、女性であった。

一方、「繡箔」については、『小西家旧蔵 光琳関

係資料とその研究』『I尾形家 家職(呉服商雁金屋)』の正保3年(1645)の「尾形宗謙呉服詠物帳」の中では「繡箔」のみだが、延宝6年(1678)の『色道大鏡』では、「地無縫箔」という言葉となる。また、「繡箔」の着用に関しては大夫が着用していたことや、婦人の礼服であったことを『守貞漫稿』などで紹介している。「繡箔」の着用は身分の高い女性ということが言葉の考察により確認ができた。

また、「慶長小袖」とこれらの言葉の結びつきは、戦後の研究者が論文などで紹介をしており、その中では、「地無」という言葉と結び付けられていることが多いことが確認できる。しかし、江戸時代の随筆にかかれた「地無」と「繡箔」の指し示している染織品が、文字情報のみで検証することは、限界があるが一つ一つ考察していくことにより、「慶長小袖」と呼ばれる染織品と結び付けられていることを確認することができる。ただ、「地無」は江戸初期の一部の文献では、練緯の地の染織品をさし、箔を使用しないことも示唆されていることから、「地無」という言葉だけで現在の「慶長小袖」とイコールとはみなし難い。また、「繡箔」という言葉は、刺繍と摺箔という技法を意味していることから、その指し示す染織品は「慶長小袖」にとどまらず、比較的、多い。そのため、「地無」の「繡箔」という言葉が重なって、「慶長小袖」の指し示す染織品により近くなるのではなからうかと考えられる。今後は、『雁金屋資料』や小袖雛形本などといった発注書に描かれた小袖発注書の考察を深め、「繡箔」の技法が使われたものが「地無」であるのかなど掘り下げた検証をしていきたい。

## 〔要 約〕

小袖様式の一つである「慶長小袖」は先行研究や現状の染織研究において「江戸時代には「地無(小袖)」や「繡箔(小袖)」と呼ばれていた」という通説を踏襲して論じられ、それらの個々の言葉に関する研究はなされていない。その為、本稿では、「慶長小袖」と呼ばれる染織品が製作されたとされる江戸時代初期の呉服発注の記録で「地無」と「繡箔」という言葉を考察する。そして、江戸時代中期以降に書かれた随筆などから、それらの言葉が江戸時代にどのような意味を持ち扱われてきたのかを検証する。また、明治以降、染織品が美術品としての価値を持ち時代判定されていくなかで、「地無」、「繡箔」



という言葉と「慶長小袖」と呼ばれる染織品と「慶長小袖」という言葉がどのように結びつけられ今日まで引き継がれているかを明らかにする。結果、「地無」や「繡箔」は、現在「慶長小袖」と呼ばれる染織品とはイコールとみなし難いことが明らかとなった。

## 参考文献

- ・切畑健：元和・寛永銘小袖裂打敷（真珠庵蔵）について―江戸時代前期の染織資料，MUSEUM, 376, 18-26（1982）
- ・花房美紀：雁金屋関連資料『衣裳図案帳』における人名の特定について～小袖意匠との関係から～，人間比較研究科年報（奈良女子大学紀要），496 - 486（2001）
- ・丸山伸彦：江戸モード誕生，文様の流行とスター絵師，角川芸術出版（東京）（2008）

## 引用文献

- 1) 河上繁樹：慶長小袖の系譜 ―その成立と展開一，MUSEUM, 383, 4-15（1983）
- 2) 莊加直子：2014年度修士論文「慶長小袖」の誕生と展開 ―名称と遺品の実態の解明一，日本女子大学大学院家政学研究科（2015）
- 3) そもそも、「ぬいはく」の漢字は「繡箔」か「縫箔」なのかという疑問はあるが，文献や研究者の中でその差について明確に論じられてはいない。日本で室町時代以降一般的に使われている「縫」の字は，「生地の上で糸が合う，布を合わせる」という意味である。日本において，刺繡は中国の影響を強く受けていて工芸的な意味を持つ。そのため縫い合わせることでない刺繡は繡うという字を使用することを丸山伸彦武蔵大学教授よりご教示頂いた。その為，文献からの引用部分は使用された文字を使用し，それ以外は本来の意味である「繡箔」の漢字を使用した。
- 4) 今永清士：重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖，MUSEUM, 163（1964）
- 5) 山辺友行：小袖染織における 地と文様について，MUSEUM, 188, 24（1966）
- 6) 土井忠生：日葡辞書，岩波書店（東京）（1960）
- 7) 小山弓弦葉：辻が花の誕生〈ことば〉と〈染織

技法〉をめぐる文化資源学，東京大学出版会（東京），35-36（2012）

- 8) 佐藤泰子：日本服装史，建帛社（東京），117（1992）
- 9) 藤本箕山：色道大鏡，八木書店（東京）（2006）  
藤本箕山は生没年が寛永3年（1626）から宝永元年（1704）とされている。いつから、『色道大鏡』を書いていたのかは定かでないため，成立期を特定することは難しい。ただ，論文構成上，江戸時代初期の文献として紹介したく，あえて生没年を記載した。
- 10) 山根有三：小西家旧蔵 光琳関係資料とその研究，中央公論美術出版（東京），序（1961）
- 11) 山根有三：同上同頁
- 12) 塚本瑞代：雁金屋御画帖の研究，中央公論美術出版（東京）（2011）
- 13) 森理恵：雁金屋『慶長7年御染地之帳』にみる衣服の性別，風俗学，9, 19-35（1999）
- 14) 森理恵：同上 22
- 15) 山根有三：前掲 22
- 16) 山根有三：前掲 32
- 17) 京都国立博物館：花洛のモード きものの時代，思文閣出版（京都），340（2001）
- 18) 山根有三：前掲 35
- 19) 山根有三：前掲 39-40
- 20) 藤本箕山：新版色道大鏡，八木書店（東京），解題 12（2006）
- 21) 藤本箕山：同上 82
- 22) 藤本箕山：同上 145-146
- 23) 森銑三，北川博邦監修：続日本随筆大成 別巻 近世風俗見聞集 I 内むかむかし物語，吉川弘文館（東京）（1981）
- 24) 津村正恭（齊藤松太郎，古賀彦太郎校閲）：譚海，国書刊行会（東京）（1970）
- 25) 日本随筆大成編集部：日本随筆大成〈第2期〉6，吉川弘文館（東京）（もともとは 山東京伝：近世奇跡考）（1974）
- 26) 喜田川守貞（宇佐美秀樹校訂）：近世風俗史（3）（守貞謄稿）卷之十六 女服，岩波書店（東京）（1999）
- 27) 森銑三，北川博邦監修：前掲の書きだしに「齢ひ八十におよびたれば，七十年來の事見及び聞および，又其頃に近き十年式拾年の事聞傳え…」とある。
- 28) 森銑三，北川博邦監修：同上 35

- 29) 森銑三, 北川博邦監修: 同上 36-39
- 30) 森銑三, 北川博邦監修: 同上 64
- 31) 津村正恭 (斉藤松太郎, 古賀彦太郎校閲): 前掲 464
- 32) 日本随筆大成編集部: 前掲 266-271
- 33) 喜田川守貞: 前掲 26-27
- 34) 莊加直子: 「慶長小袖」の研究史に関する一考察—『慶長風俗展覧会図録』と『桃山慶長 緞繡精華』を中心に, 日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科, 22(2015)
- 35) 慶長風俗展覧会図録, 松屋呉服店 (東京) (1925)
- 36) 野村正治郎: 友禅研究, 芸艸堂 (京都) (1920)
- 37) 野村正治郎: 同上 126
- 38) 野村正治郎: 同上 127-128
- 39) 莊加直子: 34 に同じ
- 40) 野村正治郎: 前掲 128
- 41) 野村正治郎: 前掲 129
- 42) 江馬務: 江馬務著作集第1巻 風俗文化史, 中央公論社 (東京) (1975)
- 43) 江馬務: 同上 180
- 44) 岡田三郎助: 時代裂拾遺, 座右宝刊行会 (東京) (1935)
- 45) 石澤正男: 時代衣装展覧目録, 東洋美術国際研究會 (東京) (1942)
- 46) 岸本景春: 綵霞帖, 芸艸堂 (京都) (1928)
- 47) 泉俊秀: 日本染織商工史, 商業研究資料編集所 (大阪) (1933)
- 48) 小山弓弦葉: 前掲 234-239
- 49) 今永清士: 重要文化財 染分四季花鳥模様縫箔小袖, MUSEUM, 163, 26 (1964)
- 50) 山辺知行: 小袖染織における 地と文様について, MUSEUM, 188, 24 (1966)
- 51) 山辺知行: 同上 24
- 52) 北村哲郎: 染織における江戸初期 一慶長繡箔考一, MUSEUM, 271, 4-13 (1973)
- 53) 徳蔵きみ: 衣服の文様について (2) 一慶長小袖と寛文小袖を中心として一, 茨城大学教育学部紀要, 25, 151 (1975)
- 54) 河上繁樹: 前掲 4
- 55) 丸山伸彦: 近世前期小袖意匠の系譜 一寛文小袖に至る二つの系統一, 国立歴史民俗博物館研究報告第11集, 203 (1986)
- 56) 山内まみ・片岸博子: 慶長小袖に関する一考察, 日本服飾学会誌, 5, 5 (1986)
- 57) 丸山伸彦: 江戸のきものと衣生活, 小学館 (東京), 20 (2007)
- 58) 長崎巖: きものと裂の言葉案内, 小学館 (東京), 28 (2005)